



Title	「潜在能力アプローチ」と環境問題
Author(s)	吉田, 文和
Citation	経済學研究, 47(2), 176-187
Issue Date	1997-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32070
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(2)_P176-187.pdf



「潜在能力アプローチ」と環境問題

吉 田 文 和

はじめに

いま世界をみると、「豊かな国」と「貧しい国」の経済的格差が広がる一方で、「豊かさ」を求める開発が世界的な規模の環境問題を引き起こしている¹⁾。そこで問われべきは、「豊かさ」と「貧しさ」とは何かである。「豊かな国」は真の意味で「豊か」になっているのか、「開発」によって求めているのは、真の「豊かさ」かが問題となる。生産された商品の価値で計る「豊かさ」が何ゆえに問題で、「豊かさ」は何で計られるべきか、「開発」との関係いかんという基本的問題に行きつく。

そこで注目されるのは、社会的選択論から経済倫理学²⁾、「飢餓の経済学的研究」³⁾などで重要な問題提起を行ってきた、アマルテア・セン（インド出身の経済学者、現ハーヴァード大学教授、前アメリカ経済学会会長）の「潜在能力アプローチ」である。さきの問題に答えるべく、A.センは「潜在能力拡大」として「開発」をとらえる立場を積極的に展開している。

本稿は、A.センの「潜在能力アプローチ」論の到達点を確認し、それを「開発と環境」問題に適用せんとする試みの1つである。

1. 問題の所在

A.センは、「潜在能力アプローチ」論を展開した著書『財と潜在能力』（Sen,1985）の「日本語版への新しいてびき」（2-3頁）で、「このアプローチの起源は、アダム・スミスとカール・マルクス、さらに遡ればアリストテレスにまで辿れるものである」と宣言しているが、その詳細については、展開していない。

この「潜在能力アプローチ」の概念上のルーツを詳しく明らかにし、「潜在能力拡大としての開発」について具体的に検討したのは、国連の『開発計画雑誌』第19巻、1989年においてである（Sen,1989a）。

この論文の冒頭で、A.センはカントの『道徳形而上学の基礎づけ』（1785年）の有名な文言を引用する。すなわち「汝の人格（Person）やほかのあらゆるひとの人格のうちにある人間性（Menschheit）を、いつも同時に目的として扱い、決してたんに手段としてのみ扱わないように行為せよ」（Kant,1785,429,訳129頁）。

この原理が重要なのは、経済計画や開発にあたり、ここでいう目的と手段の混同がおこるからである。生きている人間を究極的関心としてみて、生産と繁栄を人間生活の手段としてみるよりも、人間が生産進歩のための手段として扱われるという問題である。成功した開発の特徴づけとして、実質所得の増大と経済成長がしばしばあげられるが、経済的繁栄の達成が人間生活を豊かにすることと一対一で対応しているだろうかとA.センは問う。たとえば、1人当たりGNPが高い国でも、人間生活の質の達成度では

- 1) 国連開発計画の1996年度報告『経済成長と人間開発』によれば、世界の人口の最も貧しい20%の人たちの所得の占める割合は、過去30年間に2.3%から1.4%に減少した（United Nations, 1996, 訳2頁）。
- 2) 社会的選択論、経済倫理学での、A.センの業績の紹介・評価は、川本隆史(1995)が優れている。
- 3) A.センの「飢餓の経済学的分析」については、絵所秀紀（1991）参照。

はなはだ低い。南アフリカは、1人当たりGNPでは、スリランカや中国の5-6倍であるが、平均寿命は短い。したがって、第1に経済的繁栄は人間生活を豊かにする手段にすぎないことであり、第2に、たとえ手段としても平均的な経済上の豊かさをたんに高めることは、じっさいに価値ある目的を追求するうえで大変非効率的である。

こうして、手段と目的の混同を免れるために、手段の効果が体系的に評価される目的の確認という問題に立ち向かわなければならないのである (Sen, 1989a, 41-43)。

2. 「潜在能力アプローチ」：概念上のルーツ

A.センは自らの「潜在能力アプローチ」を、「社会変化から生ずる人間生活の豊かさによって、社会変化を評価する」方法と特徴づけ、その概念上のルーツをアリストテレスにまで遡って検討する。

まず、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を取り上げ、「人間の善」(最高善)の分析が、「人間の実践活動」と「活動としての生」に結びつけられていることに注目する(第1巻第7章1098a, Aristotle, 訳19頁)。A.センは、これを「人間生活の質を価値ある活動とこの活動の達成能力でみようとする議論」として、評価する。

次に、古典派経済学者のなかではスミスとマルクスが、人間機能の重要性和「善き生(福祉)」の決定要因としての機能する能力を明確に議論しているという。スミスは、『諸国民の富』第5編第2章第2節「消費品に対する租税」で、必需品について規定して、どれほど貧乏な男女でも信用のおける人なら、靴をはかずに人前に出ることを恥じるであろうとのべていることに注目し、恥じることなく社会的に交流する人の能力について提起している (Smith, 1776, 869-872, 訳1252頁)。

マルクスのこの問題についてのアプローチは、アリストテレスに密接に関連している⁴⁾。

マルクスが政治経済学の基礎を再定式化する

うえで重視したのは、必要な人間活動を満たすという面から人間生活の成功をみる視点であるという。すなわち、マルクスは『経済学・哲学草稿』(1844年)で、こうのべている。「国民経済学的な豊富と悲惨のかわりに豊かな人間と豊かな人間的要求とがとって代わることがわかる。豊かな人間はとりもおさず人間的な生活表明の全体性を必要としている人間のことである。彼自身を実現することが内的必然性として、止むに止まれぬこととして持っている人間のことである」(Marx, 1844, 544, 訳465頁) (Sen, 1989a, 43)。

さらにA.センは「財、機能、潜在能力」の関係についてこうのべる。生活が価値ある1組の「行為と存在」であるならば、生活の質を評価する行為は、これらの諸機能と機能の潜在能力を評価することである。この価値評価は、生活の質を、これらの行為と存在を助ける商品と収入に焦点を当てることによって行えない。アリストテレスが『ニコマコス倫理学』でのべているように、「金儲けの生活は一種の強制による生活であり、富は明らかに、いま尋ねられている善ではない。なぜならそれは有用なもの、すなわち[そのものとは異なる]他のもののためだからである」(第1巻第5章1096a, Aristotle, 訳10頁)。

したがって、課題は人間生活における多様な機能の重要性を評価することであり、マルクスが「商品フェティシズム」と呼んだものと少し異なるが関連するものを超えていくものである。諸機能自体が検討されるべきであり、機能を充足する人間の潜在能力が正しく評価されなければならない。A.センの見解では、生活の構成要素は多くの異なる諸機能の結合とみなされる。これは人々を「受動的形態」よりもむしろ

4) A.センは、M.ヌスバウムの論文(Nussbaum, 1988, 184)に引用されたG.E.M. de Sainte Croix, 1981, 55-56を論拠にしているが、それによれば、マルクスは学生時代にアリストテレスの『政治学』を読み影響を受けたという。

「活動的形態」としてみる。ここに含まれている項目は、死を逃れること、十分に栄養をとること、通常の運動をすることから、自己尊厳の達成、コミュニティ生活への参加、恥じることなく人前に出ること、まで多様である。最後の項目は、さきに引用したように、スミスが明確に論じた機能であって、全ての社会で評価される充足であるが、それに要する正確な商品量はスミスが指摘したように社会ごとに大きく異なる。

A.センの主張点は、諸機能が人間の存在の構成要素であって、人間の「善き生(福祉)」の評価はこれらの構成要素の評価の形態をとらざるをえないということである。それは生活を多様な「行為と存在」の結合としてみる見方である。潜在能力は人々が様々な生活様式を選ぶ自由を反映している。この自由へ焦点を当てる動機は、マルクスの次の主張によく示されているという。「それは、諸個人にたいする諸関係および偶然性の支配のかわりに、偶然性および諸関係にたいする諸個人の支配を打ち立てるという任務を彼らに課したのである」(Marx and Engels, 1845-46, 424, 訳475頁)(Sen, 1989a, 44)。

A.センは言及していないが、マルクスの自由と人間の発達に関する考察は、『資本論』第3巻の「必然性の王国」と「自由の王国」の定式において、明確に見られる。すなわち、「真の自由の王国」は、「必然性の王国」の彼岸において始まる。この「自由の王国」は、「必然性の王国」の上においてのみ開花しうが、そこでは、人間の力の発達(die menschliche Kraftentwicklung)それ自体が、人間生活の目的となるというのである(第3巻第48章「三位一体的定式」Marx, 1894, 828, 訳1051頁、『資本論』第3部草稿529頁, Marx, 1863-65, 838)。

3. A.センにおける「潜在能力アプローチ」の起源と展開

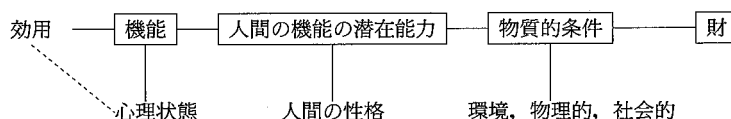
A.センが「潜在能力アプローチ」をとるに至った動機をみると、背景には『貧困と飢饉』(Sen,

1981)研究やGNPに替わる比較指標の研究があるが、直接には1979年のターナー講義「何の平等か?」が最初である。A.センは(1)功利主義的な平等、(2)総効用の平等、(3)ロールズの的な平等の限界を論じ、三者を組み合わせても妥当な理論構築は不可能であるとし、これに対して、「基本的潜在能力の平等」を提起したのである。

A.センは、例として身障者の当然満たされるべきニーズを考えるならば、この権利要求を支えるものは、限界効用の高さでも、総効用の低さでも、基本財の欠如でもないことは、明らかであるとして、三者に欠けているものとして、人がある基本的な事柄をなすうることとして、「基本的潜在能力」——身障者の例では、身体を動かして移動する能力、を概念として把握すべきであるとした。ロールズの基本財は、財にかかずらわうというフェティシズムの欠陥を背負っており、財が人間に対して何をして^くれるかということにではなく、あくまで善きものにしか目を向けていない。その反対に、効用は、財が人間に何をして^くれるのかに実際注目してはいるが、人の潜在能力にでなく、心の中の反作用に焦点をあてるところにとどまっている。こうして、基本的潜在能力に的を絞ることで、基本財に向けられたロールズの関心を無理なく拡張し、財から財が人間に対してなすことへと注意の方向を変えることができるというのである(Sen, 1982, 367-368, 訳253-254頁)。

A.センはその後『財と潜在能力』(Sen, 1985)で「潜在能力アプローチ」を詳しく展開した。

そこでは、「財と特性」と「機能」と「効用」を峻別し(10, 訳22頁)、「善き生(福祉)」とは人が充足しているありさまの評価で、「生き方の評価」と「生き方が生む幸福の測定」は別であると強調する(12, 訳24頁)。そこで、個人の達成しうる機能のさまざまな組み合わせ、あり方を「潜在能力」と定義して、「集合 $Q_i(X_i)$ は、財の特性を機能に変換する個人的特徴 F_i と財に対する支配権 X_i (権源)が与えられたもとで、個人 i が機能の選択に関してもつ自由度を表現



し、 Q_i は個人 i の潜在能力と呼ぶ」(13-14, 訳25-6頁)。功利主義的伝統は、「物理的条件の無視」と「評価の無視」という欠陥をもつ(23, 訳37頁)のに対して、他方、財貨の支配は人の善き生(福祉)という目的のための「手段」であって、それ自体として目的には成りがたい。財貨を目的と考えると、マルクスがフエティシズムと呼んだ落とし穴にはまる。人の善き生(福祉)とは人がどれほど「豊か」であるかという問題では全くないのである(28, 訳44頁)⁵⁾。

A.センにおける「効用」、「機能」、「潜在能力」の関係については、J.ミュルバウアー(J. Muellbauer)の図解整理(Sen, 1987, 40)が有効である。

ここで財貨中心の有効性は、手段として評価されても、財を潜在能力へ変換される際の多様性によって、著しく妥協させられている。例えば、よく栄養がとれていることの潜在能力に対する食糧と栄養の要求量は、人によって大変異なり、代謝率、体格、気候条件、ジェンダーによって左右される(Sen, 1989a, 47)。さらに留意すべきは、機能と自由の関係である。例えば、断食をした人、つまり餓死することを選択した人は、貧困により餓死せざるをえない人(権利剝奪者)と同一とみることはできない。観察された機能が同一であったとしても、少なくとももとの機能の表示にあつては、2つの状況は同一ではない(Sen, 1989a, 49)。

5) 以上の関係について、「社会的コミットメントとしての個人の自由」(Sen, 1990, 52訳79頁)はこうのべる。「異なるかたちの生を追求しうる自由は、個人の選択対象となる諸機能の組合せの集合を用いて表される—これを個人の「潜在能力」と呼ぶことができるだろう。個人の潜在能力を規定する要因の中には、個人の特性ばかりでなく社会の仕組みも含まれている」。

4. 「潜在能力アプローチ」の到達点

A.センは、1993年に出版された、M.ヌスバウムとの共編著『生活の質』(Sen, 1993)において、A.センの提起以来議論された「潜在能力アプローチ」に関する論点(70近くの論文がある)に応えて、その利点と困難点を再検討している。

まず、①「機能、潜在能力、価値」について、社会分析のさい、例えば、途上国の極貧層を扱うにあたっては、比較的少数の中心的重要機能と対応する基本的潜在能力によってやっていけるが、経済発展のより一般的問題を含んだ文脈においては、リストはもっと長く多様になりうる。焦点は基礎となる関心と価値に関係づけられるべきで、それによっていくつかの定義された機能が重要で、他は重要でないことになる(pp.31-32)。

つぎに②「価値目的と評価空間」については、まず評価を行うにあたり、(1)価値の目的は何か?と(2)各々の目的はどの程度価値があるか?を区別すべきであるという。潜在能力アプローチは主に価値目的の特定に関心があり、諸機能と機能すべき潜在能力によって価値空間をみる。これはもちろん深く価値的な行為であるが、(1)の問題の応えることは、それ自体で(2)の問題に応えるわけではない(pp.32-33)。

このアプローチは、他の方法と違い、生活の手段あるいは自由の手段(実収入、富、豊かさ、基本財、資源)に対して、直接の重要性を置かない。これらの変数は、価値空間に含まれる変数を通じて間接的に評価に影響するが、価値空間の一部ではない(p.33)。ここに、A.センの手段についての評価をみることができる。

さらに、③「潜在能力と自由」に関して、人間の潜在能力は人格の特徴や社会的仕組みなど

を含む多くの要因に依存していることを強調する。人間の潜在能力は個人の自由の重要部分を構成するが、自由の概念にあいまいさが残っている。人間の自由を人間が選ぶことのできる代替案の評価から独立にあるいは先だって評価することは可能であろう。選択のレンジの要素の評価は、そのレンジから選ぶ自由の評価と結びつけられるべきである(pp.34-35)。

④「価値目的と区別される行為」に関して、A.センは2つの区別を行う。1つは、(1.1)人間の「善き生」の促進と(1.2)人間の全体的な行為主体(agency)のゴールの追求の区別である。2つは(2.1)充足(achievement)と(2.2)充足する自由の区別である。この2つの区別から人間に関連した4つの異なる「好機」(advantage)の概念が生み出される。それは、(1)「善き生」の充足、(2)行為主体の充足、(2)「善き生」の自由、(4)行為主体の自由、である。例えば、人間が援助を必要とされるように権利剥奪されているかを決めるに当たり、人間の「善き生」は、人間の行為主体の成功よりも重要であろう。国家は個人が飢えや病気を取り除くことより記念碑建設に重要度をおいた場合でも、飢えや病気を克服するために援助すべき理由がある。さらに、成人の市民にとっては、「善き生」の自由の方が「善き生」の充足よりも国家の政策として重要であろう(pp.35-36)。

⑤「善き生、行為主体、生活水準」について、人の「善き生」は、「他人のことをかまわない」ということではない。むしろ、人の「善き生」は、「他人のことをかまう」関心の効果は、人自身の「生」のいくつかの特徴を通じて作用すべきである。例えば、純粹に他人をかまう充足によって生ずる幸福は(遠くの国へ政治犯を逃がす)は、明らかに彼の生活水準を落とすことなく、人間の「善き生」を高めることができる。倫理学では、人の「善き生」がしばしば他の人々の生活の性格によって影響されるというはつきりした認識は、もちろん新しいものではない。このように、他人の不幸を痛むことは、人の「善

き生」に作用するが、しかし、人の生活水準の評価からは排除すべきである(pp.36-38)。

⑥「なぜ潜在能力で、たんなる充足ではないのか」として、機能から潜在能力に視野を広げる必要性について、第1に、潜在能力は機能から派生して定義されることに留意しなければならない。潜在能力はその機能n組のセットであり、そのうちの1つの結合を人が選ぶことのできる存在と行為の多様な代替的結合を示している。もし、機能の充足がその空間における1つの点であるならば、潜在能力はそのような諸点の1セットである。さらに、潜在能力へ拡大することの意義は、「善き生」の自由の評価に関連している。自由は人の「善き生」充足のために内的重要性をもつ。機能xに対して、洗練された機能x/Sが「セットSから選択によって機能xをもつ」形をとる。これによって、断食とたんなる餓死を区別できるようになる(pp.38-40)。

⑦「基本的潜在能力と貧困」に関して、「基本的必要」と呼ばれてきたものに対する決定的に重要な潜在能力のサブセットを特定することが有用である。伝統的に収入に焦点をおく貧困分析については、収入を基本的潜在能力へ転換することは、個人間および社会間で大きく異なり、そのために基本的潜在能力の最小限受容レベルに到達する能力は、最小限の適切な収入レベルとともに変わる。重要なことは、収入と潜在能力の関係が個人間、社会間で変化することに留意することである。この点にこそ貧困に対する潜在能力アプローチの寄与点がある(pp.40-42)。

⑧「評価軸、機能、潜在能力」という項目で、A.センは、マルクス主義の立場に立つというG.A.コーエンからの批判に答える。G.A.コーエンは、潜在能力にかかわって評価軸(midfare)を持ち出してくるが、この評価軸というものはA.センが機能と呼んだものである。真の問題は、「善き生」と「機能」(あるいは評価軸)の間に明らかな関連があれば、「善き生」を分析するに当たり、「潜在能力セット」はなんらかの重要性をもつかどうかにある。これは、さきにみたように、

「善き生」の自由との関連と「善き生」充足それ自身のための自由の重要性のために「潜在能力セット」が強調されるのである。

自由は多くの側面をもっている。好きなように生きていく自由は他人の選択によって多大に助けられている。したがって、人間自身の積極的な選択という面からのみ充足を考えると誤る。人が多様な価値ある機能を充足できることは、公共活動や政策によって大変高められる。実際、「飢餓からの自由」、「マラリヤからの自由」はたんなるレトリックではない。ほんとうの意味で好きなように生きていくことは、疫学的社会的環境を変えていく公共政策によって高められる。自由がこういう面をもっているということは、自由に生きる重要な要素として、人間自身の積極的な選択の重要性を無視するものではない。この要素の存在ゆえに（他の要素が欠如しているよりも）、潜在能力セットの要素間で選択する行動は、人間の生活質と「善き生」に対して明らかな重要性を示している。断食と飢餓の例をとれば、双方とも評価軸は同じであるが、潜在能力は異なる。潜在能力は政治的社会的分析においては重要である。人がマラリヤにかからないで生活できる自由をもつという事実は、医療研究や公衆衛生のおかげであるが、しかし、人がマラリヤから自由に生活し、そうした潜在能力をもっているという事実にゆずるものではない(pp.42-46)。

A.G.コーエンは「利益を享受しうる機会」を提起しているが、これは潜在能力のセットの評価で定義された「善き生」の自由の平等と大変似ている。A.G.コーエンとの違いは焦点の違いであり、生活の質の構成要素としての選択の重要性の問題である(pp.42-46)。

⑨「アリストテレスとの関連と対比」では、アリストテレス社会民主主義の立場であるM.ヌスバウムからの批判に応える。彼女は、すでにアリストテレスの「国政」「秩序」概念と潜在能力アプローチとの関連について分析していた(Nussbaum,1988)。実際、A.センのアリストテレ

スやマルクスについての言及は、彼女の指摘によるところが多い。

A.センは、アリストテレスの政治学、倫理学において、潜在能力を機能へ公正に分配することが中心的な位置を与えられていたことを認めている。しかし、アリストテレスが人間の「善の生」を構成するのにはたった1つの機能リストがあり、人間の機能の客観的規範には必ずしも同意できないとし、むしろアリストテレスのアプローチの仕方を評価する。すなわち、アリストテレスが充足の基礎として「豊かさ」を拒否したこと（基準として富と収入を拒否）、価値ある活動で幸福(eudaimonia, *εὐδαιμονία*)を分析したこと（効用主義者のように精神状態よりも）、人間活動が選ばれたプロセスそのものを検討する必要性である(pp.46-48)。

A.センは最後に「潜在能力アプローチ」の不完全性を認め、このアプローチが平等の問題に動機を持ちながら、さらに個人の機会と成功の評価にまで展望をもちうることを強調している(pp.48-50)。

5. 「潜在能力アプローチ」の課題

A.センの「潜在能力アプローチ」を具体的に適用しようとする場合、いくつかのことが問題となる。

朝日譲治(Asashi,1988,8-9)は、このアプローチの意義と問題点について、大要こう指摘している。

①「潜在能力」が現実に観察可能な財・サービスを伴い計測ができるので、生活水準の測定、貧困研究などの社会問題に応用可能で、個人間効用比較を回避し「潜在能力」を尺度として直接個人間の福利の比較ができる。

②「潜在能力」は「絶対的」な尺度となるので、時代と場所を超えた比較ができる。

③個人を単位にできる。

④たんなるモノの比較を超えて便益の本質に迫る。例えば、「救急医療サービス」では、救急

病院数、救急車の数、スタッフ数ではなく、実際に医療が受けられるまでの時間が意味のある尺度となる。

他方、問題点としては、

- ①尺度としての「潜在能力」の選択にはどうしても恣意性が混入する。
- ②「本質的な潜在能力」と「派生的な潜在能力」があるはずである。
- ③「潜在能力」は財・サービスに結びついた概念であるが、それが財・サービスから離れ、一人歩きを始める。権利との関係の一層の研究が待たれる。
- ④「尺度の恣意性」を排除するために、考察対象となっている社会に「潜在能力」を選択させる可能性もある。

朝日譲治氏も指摘する「潜在能力」の選択と順位の問題に関連して、A.センの場合、「財と潜在能力」の関係を問題にすると、消費手段と労働手段がともに財として一括されている問題がある。「潜在能力」の発達という観点から見る場合、潜在能力の主体と消費手段と労働手段の関係は、区別する必要がある。

マルクスは、人間の身体器官への労働手段の付け加えについて、「こうして、自然的なものがそれ自身彼の活動の器官になる。その器官を彼は、聖書のことばにもかかわらず、彼自身の肉体器官につけ加えて、彼の自然の姿を引き伸ばすのである」(Marx.1867,194,訳235頁)とのべている。これは、人間が外部の物(自然)を自らの活動器官にかえることによって、人間の身長をのばすようなやり方で自分の器官に付け加えるということである。これは、ヘーゲルを念頭において、動物と対比して、人間の労働手段が自らの身体的制限を乗り越えていくことをのべたもので、人間の労働主体と労働手段の相互促進関係を示している⁶⁾。もちろん、この関係は一方的な発達だけではなく、逆の能力の一面化

や退化の問題をとまなう。例えば、自動車の利用は、人間の移動能力を高めるが、自動車だけを利用して歩かなければ、歩行能力を弱める(自動車公害や交通事故の問題を別として)。コンピュータの利用は、人間の情報処理能力を高めるが、注意しなければ、人間の視力を弱め、テクノストレスで精神能力を一面化し、認識能力や方法も変える。すべて新しい労働手段の利用には、社会的条件を通じて、こうした側面がつきまとう。人間の「潜在能力」の発達と退化をこうした観点から分析していく必要性はますます重要になっている。

A.センは「財とその特性」と人間の「潜在能力」を区別し、実際に人間が財を消費、享受できる機能を通じて、人間の潜在能力のあり方に注目した。そのことの意義を確認したうえで、とくに公共政策の目標という面から「潜在能力の発達」という視点を強調したい。

こうした側面については、日本では、基礎経済科学研究所編(1982)、池上惇(1986)が展開してきた問題領域である。

池上惇(1986,52-53)は「潜在能力の形成とコミュニケーション」という項目で、「資本主義経済において、分業や、協業や、あるいは技術を用いることによって開発される人びとの才能は、潜在的な能力としてみれば、それ以前の社会にくらべ、きわめて大きなものがある。…個々人のもつ、この潜在能力は、相互に水平的に交流しあって、個々人に学習の機会をあたえ、これらの能力を相互に活用する方向にはすすまない。…貨幣のみが個々人の潜在能力を社会の力としてまとめあげ、この社会の力を貨幣を支配する個人や集団の「利殖の力」、つまり、貨幣を増殖させる手段に転化してしまう」として、さらに潜在能力の部分的・一面的発達と、人間と労働の潜在能力の個別的評価と社会的評価のギャップを問題とした。最近では、池上惇(1991)は、A.センの議論を、消費者の享受能力を問題にしたものとして評価している。

これまで、マルクス経済学の側でさえ、「人間

6) 詳しくは、吉田文和(Yoshida,1987)第1部第1章参照。

発達」と経済学は、疎遠なものとなされてきたが、さきにのべたように、マルクス自身が「自由の王国」では、人間の力の発達それ自体が、人間生活の目的になると喝破していたのである。

生産された商品の価値で計る「豊かさ」が何ゆえに問題で、「豊かさ」は何で計られるべきか、「開発」との関係いかにという基本的問題を、再検討するためには、商品フェティシズムを超えて、ここにいかざるを得ないのである。

A.センの「潜在能力アプローチ」で、検討を要するもう1つは、社会の「潜在能力」という概念はありうるかという問題である。最近、環境問題に関連して、社会や政治システムの「環境問題対処能力形成」(Capacity building for Environmental Policy)が、提起されており(OECD,1995. Jänicke,1995), A.センが「潜在能力」を問題とするのは、あくまでも個人に対してであるが、このような「環境問題対処能力形成」を考えるうえで、「社会の潜在能力」は検討されてもよい課題である。

6. 「潜在能力アプローチ」と環境問題

A.センが直接環境問題について人口問題との関連で分析しているのは、1994年の国連世界人口会議(カイロ)に関連した講演「人口問題：妄想と現実」においてである(Sen,1994,62-71)。ここでも、経済学の古典をふまえた「潜在能力アプローチ」が分析力を発揮している。

人口問題を巡る悲観的な見方がうまれているが、この問題についての学説史回顧が重要である。マルサスが人口増加と食糧の間とのアンバランスから生ずる恐ろしい災害を予言して(Malthus,1798)以来、世界の人口は6倍近く増え、一人当たり食糧生産と消費は著しく増え、平均寿命と生活水準は予想を越えて増加した。マルサスが予想を誤ったということは、しかしながら人口増加についての現代の恐れが同じように誤りだということを示していない。

人口増加の90%が途上国で起きており、ここ

から先進国への人口移動の厳しい圧力という考えがでてくる。しかし現実には南から北への移民増大はコミュニケーションと運輸による世界の縮小、労働力移動への経済的障害の減少に関連してる(p.62)。

世界の人口分布におけるアンバランスという心理的感覚が生まれているけれども、ここで留意すべきは、第3世界は今、人口変化を経ている最中であり、この人口の急増は欧米では産業革命期に経験したことである。今日でさえも、アジア・アフリカの合計シェア(71%)は、1650年と1750年のシェアよりも低い。もし国連の予測(2050年までに78.5%)が実現すると、アジア・アフリカは比率において、ヨーロッパの産業革命の前に戻ることになる。

もう1つの心配は、人口増加と食糧供給、収入水準、環境に対する関係である。その前に、人口問題に対する2つのアプローチの仕方を区別しておく必要がある。1つは、自発的な選択と協力による解決と、他は立法的経済的強制によって押さえ込む方法である(p.63)。

マルサスは、一種の押さえ込む立場を強力に主張した。マルサスとコンドルセを区別したのは、まさにこのためであった。コンドルセは18世紀のフランスの数学者・社会学者で、マルサスはコンドルセから人口が生活手段を上回るという分析を取ってきた。しかし、啓蒙主義の伝統に当然のこととして、コンドルセはこの問題が理性のある人間行動によって解決されると確信していた。すなわち、生産性の増大、省資源と廃棄物の減少、教育によって出生率は下がると。実際、開発は人口抑制上多くのことをなした。とくに、経済的保障と豊かさの条件、避妊法の普及、教育の拡大、低死亡率は、世界各地で出生率低下のために大きな効果をあげている(p.64)。マルサスの恐れは誤っていた。十分な時間があれば、開発が人口を安定させるために、十分頼れるにしても、健康ケア・衛生改善・栄養改善のために死亡率は大変速く低下する。しかし、出生率はゆっくり下がるので人口の増

加が起きるのである。そこで、押さえ込む見解が出てくるのである。

また、人口増加と一人当たり収入低下を結びつける見解があるにもかかわらず、低所得国の平均人口は一人当たりGNPが上昇しているのみならず、成長率は高所得国よりもっと高い。サブサハラは政治的混乱が原因で経済が停滞し、家族計画と人口にも悪影響を与えた(p.65)。

マルサスが問題にしている「人口と食糧のアンバランス」を見ると、世界の食糧生産は上向きであり、むしろ問題は食糧が安くなり、食糧を利益を上げて売ることを困難にしている点である。食糧価格が長く安く抑えられていることを考えると、食糧生産が市場における効果的な需要不足によって抑えられているというのに十分な理由がある(pp.66-67)。

もう1つの問われるべき問題は、人口問題が人々が被っている権利剥奪の主因かどうかである。人口増加を大都市のスラムの拡大の主要因に見る見方は、経験的にも説得的でない。ある特定地区の権利剥奪の程度には多くの原因があり、それらを全て過剰人口の結果としてしまうのは、社会分析の放棄である。拒否されるべきは、人口増加のみを独立してみる見方である(pp.67-68)。

コンドルセは人口増加によって「幸福がたえず減少すること」についての関心で、自然資源が枯渇してしまい、その結果生活条件が悪くなる可能性を考えていたパイオニアである。コンドルセの特徴ある合理主義者としての解決は、主に出生率を自主的に理性的な手段で減らすことで、コンドルセはより将来を考えた技術の開発を想像していた(Condorcet, 1795『人間精神進歩史』)。

人口増加の環境への影響は、マルサスが引き起こした関心を受けた食糧問題よりも重大になりうる。もし環境が人口圧力によって被害を受けるとすると、このことは明らかに我々が送る生活様式に作用し、「幸福の減少」の可能性は大変大きい。この問題を扱うに当たり、我々は再

度長期と短期の問題を区別しなければならない。短期的にみると、第3世界の食糧、燃料、他の商品の一人当たり消費は相対的に少ないという事実支配される。したがって、これらの国における人口増加の影響は、相対的には地球環境に被害を与えていない。しかし、地域環境の問題は、多くの途上国経済に重大となっている。それは規制されていない産業からの周辺への汚染から始まり、原野や木材などの農村の資源への人口密度の圧力までである。だが、依然として事実であるのは、オゾン層、地球温暖化や他の地球環境の要因で、一人のアメリカ人は一ダースのインド人とジンバウエ人をいっしょにしたよりも否定的な影響を与えているという点である。

センは、地球温暖化問題に関連して、センは別の論文で(Sen, 1995, 32-33)、海面上昇や乾燥化等、地球温暖化の影響はバングラデッシュやアフリカ諸国など「貧しい国々」がより深刻であるとし、「世界全体の生産と一人当たり消費」という集合的指標では、不十分であるとしている。「パレート最適」概念を、「もし豊かな人々の快楽を削減することなく貧しい人々の生活を改善することができなければ、その現状がパレート最適とみなされる」(Sen, 1983, 95)と、批判していたセンならではの視点である。

地球環境のために、第3世界の強制的な人口制限を今すぐ要求する人々は、この基本的な事実をまず認識しなければならない。こういったからといって、地球環境に関する限り第3世界の人口増加は心配いらないというのではない。途上国における人口増加の地球環境への長期的影響は大きくなると予想される(p.68)。

出生率低下が遅いので、これと長期的問題は今すぐ取り組まなければならない。疑いなく、解決はコンドルセが指摘したように、2つの方向である。1つは廃棄物を少なくし、汚染を減らす新技術と行動パターンを開発すること、2つは人口増加をだんだん下げる社会経済的変化を促進することである。この点では、婦人教育、死

亡率の低下、経済的手段と保障、生活様式の改善によって、次々と出生率は下がっている(p.68)。

社会経済的变化の過程がいずれ出生率を低下させることに疑問はない。実際、世界の人口増加率ははっきりと低下している。1970年代の2.2%から1980年代の1.7%までになっている。教育の拡大、健康サービスの増大は、貧しい国では労働集約的だが賃金は安いので効果的である。スリランカ、コスタリカ、インドネシア、タイは、こうしたオープンで自発的な方法をとってきた (p.69)。

これに対して、中国の強制的な人口政策は諸困難が伴う。第1に、自由が価値あるものとされれば、このアプローチに伴う自由の欠如は、それ自体で社会的損失とみなされなければならない。出産の自由の重要性は世界中で婦人グループが強調している。インドでは1970年代に強制的産児制限を行ったが、引き続き総選挙ではそれを支持した政治家は圧倒的に負けたのである。第2に、人々が強制的な産児制限を受け入れるかどうかという基本的問題を別として、その特別な帰結を考えなければならない。一人っ子政策は第2子を見做し、幼児死亡率を高め、女児殺しの問題がある。これは道徳的にも許されず長期的に、政治的にも許されない。第3に、こうした強制的な方法でどれだけ追加的減少が達成されたか不明である (pp.69-70)。

中国とインドの比較をすると有用である。国全体をみると、中国は2.0%、インドは3.6%の出生率である。この対比によって、どの程度まで中国の強制的政策が効果を上げているかは不明である。なぜなら、中国の方が女子の識字率が高く、平均寿命も高く、女子の参加率が高いからである。インドは多様性の国なので、中国と比較できる識字率の高いケララ州は、協力的な方法で出生率を1979年の3.0%から1991年の1.8%まで下げたが、一方中国は同じ期間に2.8%から2.0%に下げただけでそれほど低下していない(p.70)。

結論として強調すべきは、以下の点である。

人口問題が深刻なのは、「人口の自然増と食糧の割合」のゆえでもなく、黙示録的な問題でもない。人口増加の環境への長期的作用については心配すべき理由はある。高い出生率の生活の質への悪影響、とくに婦人への悪影響を考えるべきで、教育への機会増大、幼児死亡率の低下、経済的保障の改善、婦人の雇用や政治への参加、これらが出生率を速く減らすことになる(p.71)。

以上のように、A.センは経済学の古典に立ち返り、人口問題の基本的問題を論じ、出生率低下に対する自発的方法と強制的方法を対比させ、あくまでも個人の自由を尊重し、個人の「潜在能力」を高めることを通じて出生率を低下させる、コンドルセの示した方向を強調するのである。環境問題との関連では、短期と長期とにわけてこの問題を分析する視点から、第3世界の人口問題を位置づける。

ここでさらに深めるべき問題は、「潜在能力」と環境破壊との関連である。A.センは、さきに紹介した「生活の質」において、アリストテレスが「人間の善」の側面を議論するにさいして使われる言葉、「*dunamin*」(*δυναμις*, 可能性, 潜勢力)は、「*potentiality*」と訳される。すなわち、存在あるいは行為の可能性であると注釈を付けている(Sen, 1993. 30, note 2)。

私は、かつて環境問題を考察するさいの視角として、「自然生産力」破壊としての生産力破壊を提起したことがあった。すなわち、「自然生産力」とその条件の破壊、それを通じての労働能力としての生産力の破壊、労働主体の生産物・獲得物としての生産力の破壊を検討した。すでに古典は、資本主義のもとにおける人間自然力破壊と土地自然破壊の同時進行、ならびに相互関係、とくに人間自然力破壊の基礎としての土地自然破壊という問題を提起していた。『資本論』は「労働主体の労働能力としての生産力」と「自然的生産力」の条件とを対比し、この「富の二つの原始形成者(die beiden Urbilder des Reichtums)」(Marx, 1867, 630, 訳788頁)が同時に破壊される傾向を指摘し、さらに『剰余価値

学説史 (1861-1863年草稿)』は、国債と対比して労働者と土地の先取的消費について、「この場合に消費されるものは、dunamis(可能性、可能態、能力)として存在しているのであって、無理強いされた消費の仕方によってこのdunamisの寿命が短縮されるのである」(Marx, 1861-1863, 304訳404頁)とのべていた。すなわち、先取的消費による労働者と土地のデユナミス(可能性、可能態、能力)の寿命の短縮、つまり労働能力と、土地自然力(土地肥沃度)としての「自然的生産力」との条件の寿命短縮の問題である。

そこで「自然的生産力」とその条件の破壊が、労働能力としての生産力の破壊を引き起こす多様なプロセスについて検討した(Yoshida, 1980, 95頁以降)。A.センの「潜在能力アプローチ」との関連でいえば、環境破壊によって人間の「潜在能力」がいかに被害を受け、その発達が阻害され、逆に「潜在能力」を守りそれを発達させるためには、何が必要かが示されなければならないのである。また自然生産力破壊についても、種の絶滅によって、いわば自然の「潜在能力」が破壊されるという視点も考えられる。生物多様性の保護の基礎に関わる問題である。

7. 結論

A.センが提起した課題は、①「開発」の真の目的は、「人間の潜在能力」の開発であって、その目的に対して、収入や「経済的繁栄」は手段とみなされなければならない。②その手段と目的の取り違えは商品フェティシズムによるものにとらわれた見方であるというものである。私たちは、この問題提起を真摯にうけとめ、発展させなければならないが、そのさい、手段と人間主体の潜在能力の発達・退化の相互関係がさらに検討される必要がある。環境破壊との関係では、それが人間の潜在能力の破壊・退化をもたらすプロセスを分析する課題が生まれてくる。

引用文献

- Aristotle(4th c.BC). *The Nicomachean Ethics*. 加藤信朗訳『アリストテレス全集13 ニコマコス倫理学』岩波書店、1973年。
- Asahi, J. [朝日譲治] (1988). 「ケイパビリティ・アプローチの意義と問題点」豊橋技術科学大学『雲雀野』第10号。
- (1992)『生活水準と社会資本整備』多賀出版。
- Condorcet, M.J.A.N.(1795). *Esquisse d'un Tableau Historique des Progrès de l'Esprit Humain, X^e Epoque*. 渡邊誠訳『人間精神進歩史』岩波文庫、1951年。
- Esho, H. [絵所秀紀] (1991)「飢餓の政治経済学—A.K.センの問題提起」『東京経大会誌』第172号、1991年、のちに『開発と援助』同文館出版、1994年所収。
- (1996)「ケパビリティ・アプローチと「人間開発」」『経済セミナー』1996年12月号。
- Ikegami, J. [池上惇] (1986)『人間発達史観』青木書店。
- (1991)「固有価値の経済学」京都大学『経済論叢』第148巻第1・2・3号。
- Jänicke, M. (1995) "The Political System's Capacity for Environmental Policy" Forschungsstelle für Umweltpolitik Freie Universität Berlin, 1995, 邦訳、北海道大学『経済学研究』第46巻第3号、1996年。
- Kant, I. (1785). *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Kant's Werke, Akademie, 1911, 宇都宮芳明 訳、以文社、1989年。
- Kawamoto, T. [川本隆史] (1995)『現代倫理学の冒険』創文社。
- (1997)「アマルティア・センの《超学的》探求」『経済セミナー』1997年2月号。
- Kisokeizaikagaku-kenkyusho [基礎経済科学研究所] (1982)『人間発達の経済学』青木書店。
- Malthus, T.R. (1798), *Essay on the Principle of Population*., 高野岩三郎・大内兵衛訳『人口の原理』岩波文庫、1962年。
- Marx, K. (1844). *Ökonomisch-philosophische Manuskripte* (1844). MEW. Ergänzungsband 1,

- (1974) 訳『マルクス・エンゲルス全集』第40巻, 大月書店, 1975年.
- (1845-46). *Die deutsche Ideologie*, MEW.Bd. 3(1958), 訳『マルクス・エンゲルス全集』第3巻, 大月書店, 1963年.
- (1861-1863), *Theorien über den Mehrwert*, MEW, Bd.26.3(1968).『剰余価値学説史』大月書店. 1970年.
- (1863-65). *Ökonomische Manuskripte 1863-1867*, MEGA.II.4.2.(1992).
- (1867). *Das Kapital*. Bd.I.MEW.Bd.23.1962.『資本論』第1巻, 大月書店, 1968年.
- (1894). *Das Kapital*. Bd.III.MEW.Bd. 25.1964.『資本論』第3巻, 大月書店, 1968年.
- Nussbaum, M.(1988) "Nature, Function, and Capability: Aristotle on Political Distribution," in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, Supplementary Volume, 145-184.
- OECD (1995) *Developing Environmental Capacity*.
- de Sainte Croix, G.E.M.(1981) *The Class Struggle in the Ancient Greek World*, Cornell University Press.
- Sen, A.K.(1979). "Equality of What?" (The Tanner Lecture at Stanford), rep. in Sen(1982).
- (1981). *Povety and Famine*, Oxford:Oxford University Press.
- (1982). *Choice, Welfare and Measurement*. Oxford:Blackwell. 大庭健・川本隆史訳『合理的な愚か者』勁草書房, 1989年.
- (1983). "The Profit Motive," Lloyds Bank Review, 147. in *Resources, Values and Development*, Basil Blackwell, 1984.
- (1985). *Commodities and Capabilities*. Amsterdam:North-Holland. 鈴村興太郎訳『福祉の経済学』岩波書店, 1987年.
- (1987). *The Standard of Living*. Cambridge:Cambridge University Press.
- (1989a). "Development as Capability Expansion". *Journal of Development Planning*, 1989.
- K.Griff & J.Knight eds., *Human Development and the International Development Strategy for the 1990s*, Macmillan. 1990に再録.
- (1989b). and Drèze.J *Hunger and Public Action*. Oxford:Clarendon Press.
- (1990). "Indivisual Freedom as a Social Commitment." *The New York Review of Books*. June 14, 1990. 川本隆史訳『みすず』第358号, 1991年.
- (1993). "Capability and Well-Being.", in M. Nussbaum and A.Sen(eds.), *The Quality of Life*. Oxford: Clarendon Press.
- (1994). "Population:Delusion and Reality." *The New York Review of Books*. September 22, 1994.
- 同趣旨の論文として, "Fertility and Coercion", in The University of Chicago Law Review, Vol.63. No.3, 1996.
- (1995). "Environmental Evaluation and Social Choice:Contingent Valuation and the Market Analogy", *The Japanese Economic Review*. Vol.46. No.1. 1995.
- Smith, A.(1776). *An Inquiry into the Nature of Causes of the Wealth of Nations*. R.H.Campbell and A.S. Skinner, eds.(1776)Oxford: Clarendon Press. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波書店. 1969年.
- United Nations(1996), *Human Development Report 1996*, Oxford University Press, 国連開発計画の1996年度報告『経済成長と人間開発』古今書院.
- Yoshida, F. [吉田文和] (1980)『環境と技術の経済学』青木書店.
- (1987)『マルクス機械論の形成』北海道大学図書刊行会.
- なお, A.センの著作文献目録は, K.Basu et al eds. *Choice, Welfare and Development*, Oxford:Clarendon Press, 1995に収録されている。